

追悼文

ユニークな学説で啓発

入江 秀利

富來隆先生は、藤内喜六・竹長賢治氏との子弟の関係で、以前から別府の地域史の研究についてご助言やご指導もありました。しかし、別府の歴史と深い関わりを持たれるようになったのは、昭和五十九年に市制執行六十周年を迎え、その記念として発行されました『別府市誌』の編集委員を、お勤めになられてからではないかと思えます。

昭和六十二年に安部巖・藤内喜六先生のご提唱で「別府史談会」が発足いたしますが、当初からお力添えをいただき、講演会を何度もお引き受けいただきました。

その後、会誌『別府史談』に地域の事柄にテーマを絞られて、十二編のご投稿をいただきました。

先生は当初、夏至・冬至の日出の角度、天道線と北斗信仰の南北線上に聖地があることに言及された「鶴見・由布をめぐる神々」と、天道線と物名の語源をハングルに据えて考察された「(記・紀)景行の豊後進攻と速津媛の奉迎」を発表されました。それから、マックス・ウェーバーの社会学を根底におかれ、言葉のもつ二面性に関心を示されて、「人(ひと)と言葉(ことば)——鶴見北中・原中の地名——」、つぎに地域の小事を克明に調べられて、「言葉と地名——鶴見・石垣をめぐる——」に持論を披瀝されました。

ひきつづいて、地名からタタラの小事名が四ヶ所あることに気付かれて、「別府のタタラ文化——言葉と地名——」で別府の鍛冶文化を指摘され、「鍛冶文化の変容——言葉と生活——」には白鳥伝説まで登場しました。タタラから始まった鍛冶文化のご論考は「別府太郎・次郎および鷹の塚(カリスマ化のみち)」、「風ノ岩窟と土蜘蛛——付、速津媛のこと——」、「鬼の岩窟と鉄と聖地」でタタラに始まる広範囲な展開に一応終止符を打たれました。

小事名の調査から明礬のトビ・トビノオの地名に注目され、その地にヘビの伝承があることから、万能神としてのヘビ(トビ・ナガラ)へ言及された「トビと太陽とエビス様——福神信仰として——」へ、つづいて大神氏の出自さらに中国、インドシナへも論究されて、最終稿の「トビ(竜蛇)神と南方文化」を執筆していただきました。

富來隆先生は、『別府史談』という肩の凝らない雑誌にのびのびと新説を開陳されました。また、ご投稿を楽しみにされ、亡くなる三日前にも、奥様を通じて次号の構想を伝えてくださっていました。

先生は、常にユニークな学説をたてられて私たちを啓発されました。ご卓説に接することができなくなると思うと、実に残念です。